

『地下室の手記』の『奇妙さ』をめぐって

国 松 夏 紀

『地下室の手記』は、奇妙な作品である。奇妙だ、何か変だ、というのは、この作品の率直な読後感、分析的思考の働く前の、この作品に対する最初の漠然たる印象である。いささかナイーブにすぎるかも知れないが、この『奇妙さ』が私の『地下室の手記』論の出発点である。この出発点をめぐって考えていることを二、三、覚え書き風に綴っておく。

コンスタンチン・モチュールスキイの『ドストエフスキイ・生涯と作品』は、一九四七年にパリで刊行された、ドストエフスキイ研究史上の古典的名著のひとつである。その第十二章が『地下室の手記』論にあてられている。二〇二頁、主にドストエフスキイ自身の書簡を資料として、と言うよりはむしろ書簡そのものをして語らしめる態で——これは、モチュールスキイのこの評伝にあつて特徴的

なことである、——『地下室の手記』の執筆状況を跡づけた後、作品論に移る冒頭のところで、『地下室の手記』それは「奇妙な」作品である。▽と述べられている。モチュールスキイもこう言っているところを見ると、『奇妙な』作品という印象は、私一人の孤立したものではなさそうである。

また、そもそも作者自身が自分のこの作品に対してそうした印象を持っていたふしがある。モチュールスキイの記述も、それが踏まえられているのである。

一八六四年三月二十日付、モスクワから兄のミハイルに宛たドストエフスキイの書簡の一節を引用しよう。

▲例の中篇小説(ポーヴェスチ)にとりかかりました。思っていたより難しい仕事です。その調子はあまりにも奇妙であり、かつ

ぶつきら棒で、読者に嫌われるかも知れませんが、しかし、詩情(ポエズイヤ)が全体の調子を乗げるでしょう。▽(傍点は、引用者)

この三月二十日は、『地下室の手記』第一部検閲許可の日付と一致する。つまり、この時すでに第一部は書きあげられており、従って、ここで述べられている『中篇小説』とは、『地下室の手記』第二部以降のことである。それを執筆中の感想、或いは見通しと言ったものがここで語られているのである。

作者ドストエフスキイ自身の見通しである『奇妙さ』とどれほどのズレがあるのか、或いはどれだけ一致するのか、今となつては明確にしようもないのだが、結果としてこの見通しは当たったことになる。

『地下室の手記』は、第一部と第二部とからなる。現行ナウカ版三十巻本全集第五巻の

テキストでは、第一部が二十四頁、第二部が五十五頁であり、第一部と第二部とは量的にも、バランスがとれていない。これも▲奇妙さの由来に関わるかも知れない。

第一部ではまず、語り手地下室人が、自分の▲地下室について語る。次に、▲利益を標榜する功利主義哲学やナイーブな進歩に対する信念と論争する。そして、自身身の物語に立ち返り、ある思い出について語り始める。

続く第二部では、語り手地下室人が、自分の世界観はロマンチックなものであること、それが書物からとられたものであることを語る。それを証明するように、ある無礼な士官との地下室人の所謂▲決闘のことが語られる。次に、学校時代の友人との出会い、送別の会の一件、そしてリーザとの出会いのことも語られる。そして、家庭生活の些事、下男アポロンとのいざこざ、リーザの訪問と自分の裏切りのことが語られる。

ほぼこのように把握される『地下室の手記』に対して、モチュースキイは次のようにその▲奇妙さを分析している。

▲第一部の哲学的議論と第二部における主人公の破廉恥な▲アネクドットとの結びつ

きは、まったく作りものめいている。最後になつてようやく、これら二つの部分の有機的で緊密な結合が明らかにされるのである▼

右の▲結合をどうとらえるかは議論の別れるところであり、保留しておくが、モチュースキイもまた、第一部と第二部との奇妙なアンバランスに注目しているのである。

第一部の論争の印象は圧倒的である。論争というよりは一種の思想的闘争とも呼ぶべきものである。理性にもとづく思想すべてにはほとんど生理的嫌悪を催す地下室人の思考は、反近代といったところに収斂して行くかのようである。これに対して、ベタ雪の連想に誘われて語る第二部は、あまりにも甘い回想のように思われる。甘いと言っても、あくまで第一部に比べてのことである。士官との▲決闘、友人の送別会、リーザとの出会いと別れ、それぞれが地下室人にとっては、その本質にかかわるつらい経験であり、これまで自分自身でも強いて思い出すまいとしていたことであるのだから。

第一部の論争において特徴的なのは、地下室人によって想定されている聴き手、もしくは呼びかけの対象、▲あなたがあたがである。ところが第二部では、この▲あなたがあたがが

ほとんど姿を消してしまう。それにかわって登場する友人たちなり、リーザなり現実の対話の相手がいた場面が回想される。それによつて、第一部では抑制されていた、或いは言わば思想に隠されていた心情的なものが暴露されてしまっている。この意味でも、第二部は、第一部に対してバランスを欠いた叙情的逸脱とさえ見做し得る。

ここで▲叙情的の言う時、先に引用したドストエフスキイの書簡中の▲詩情が全体の調子を柔げるのといふことはも想起されるのであるが、▲奇妙な印象を与えることになったとしても、このような形で作者の見通しが実現されているとも考えられるのかも知れない。

『地下室の手記』を、ドストエフスキイの創作の鍵とする考え方、『罪と罰』『白痴』『悪霊』『未成年』『カラマーゾフの兄弟』といった長篇小説を解明するヒントであると考える方は、かなり一般化してしまったようであり、それはそれなりに異とするにはあたらない。しかし、その際も中心は第一部におかながちである。第二部をも含めた場合の▲奇妙さに立ちもどって、考え直してみる必要がありそうである。